# 豆田きなこの古民家ぐらし

ミラ Mira




アルファポリス文庫

https://www.alphapolis.co.jp/

# 目次


序章　豆田きなこの豆ぐらし　5
第一章　高瀬さんの好きなところ　31
第二章　風花さんの好きなところ　75
第三章　二見くんの好きなところ　127
第四章　椿ちゃんの好きなところ　173
第五章　冴子さんの好きなところ　217
第六章　豆田きなこの好きなところ　263

# 序章　豆田きなこの豆ぐらし

「豆田佳奈子です。『きなこ』って呼んでください」

おばあちゃん直伝の自己紹介だ。豆は小さいけれど、強くて、栄養満点。きなこはみんなに寄り添って、そっと味を甘くする、すり潰した豆である。

「きなこ」のあだ名に恥じぬよう、人に寄り添って、ほんわかさせるような人になれたらいいなと思って生きてきた。

けれど、長年愛用してきた定番の自己紹介でさえ、その頃の私はできなくなっていた。もう全部を失ってしまって、前も見えないくらいに真っ暗。

しかし、そんな状態であってもなんとか奮い立ち、長野県安曇野にある光福寺を訪れた。おばあちゃんが「死んだら必ず、福さんに知らせてほしい」と言い遺したからだ。

その寺の離れにある田舎家で、私は丸い豆粒みたいな頭をした福さんに出会った。彼は八十歳になる、しわしわの笑顔が穏やかなおじいさんの和尚さんだ。

「祖母が亡くなったので、ご報告に来ました」

小さな和室で互いに正座して向かい合うと、丁寧に祖母のお悔やみをもらった。だ



がその後、異常な悲愴感を漂わせる私を彼は見逃さなかった。

「そんな酷い顔をして、何があったんだい？　話してごらん」

誰かに話を聞いてほしくてたまらなかったのだと思う。その穏やかな声に絆され、私は抱えていたものを泣きながらさらけ出した。

「それは大変だったね。今まで本当に、一人でよくがんばってきたよ」

福さんは包み込むように話を聞いてくれて、深い労いをくれた。

「あ、ありがとうございます……！」

あのときの私に、その労いがどんなに必要なことだったか、福さんはきっとわかっていた。人のやわらかいところを、そっと撫でてくれる彼に安心した。

「私、もう、これからどうしていけばいいのか……」

事情を聞いた福さんは、とりあえず一旦涙が落ち着いた私に言った。

「佳奈子さん、良かったらシェアハウス『あずみの』に住まないかい？」

福さんが所有する空き物件を、数年前にシェアハウスにしたそうだ。彼の住居はこの田舎家なので、シェアハウスに彼は住んでいないという。

「わたしのところに話をしに来た縁のある人の中でね。きっとこの場所が必要だと思う子を、わたしが個人的に誘っているんだよ」

福さんは「あずみの」の写真を見せてくれて、ここだよと示す。どっしりした古民家が写っている。

「ここに住んでいるのは、わたしに相談をしに来るような子たちだ。まあ、みんな何かしらの事情を抱えて集まっているからね。変わり者ばかり暮らしているけれど」

わははと福さんは明るく笑い飛ばす。

「でも、いい子たちばかりでね。一人でいるよりずっと、気持ちが丸くなる。そんな場所だよ」

泣き腫らした目で写真を見つめる私に、福さんは続けた。

「あずみのの住人には、わたしから一人ひとりに違う宿題を出しているんだよ」

彼はいたずらっぽく笑い、目元に携えた皺をさらに深くする。

「どんな宿題を出しているかは、内緒だけどね」

宿題なんて小学生みたいな響きだ。

でも私は、これからどうしていいか、まるでわからなかったから。自分で決められないときに、ひとまずの行き先と、やることを与えてくれるのはありがたい。

「この老いぼれから見ると、若人は瑞々しい。しかし、脆いところもある。だからみんなのことが心配でね。良ければ、あずみのに住んで、宿題を受け取ってくれないか



い？」

助けの手を差し伸べてもらっているのは私のほうだ。なのに、「受け取ってくれ」だなんて願う彼が、どうしようもなくあたたかかった。おばあちゃんが彼に会わせてくれたような、そんな気がして、すぐに頷く。

「わたしからの宿題は『好きなもので、心をいっぱいにしなさい』だよ」

あのときの、福さんの優しい声は今でも耳に残っている。

そうやってシェアハウス「あずみの」に引っ越してきて半年。今の私は宿題をこなしながら、また「きなこ」と呼んでもらえるようになっていた。

○●○

シェアハウス「あずみの」は長野県安曇野市の端にあるお寺の、裏手にある。やや住宅街から離れた、築百年の古民家だ。雄大な山々を背にした悠々たる平屋建てで、かやぶき屋根の上にトタン瓦を乗せて補修されている。古い柱を残してリノベーショ

ンを施した、情緒ある佇(たたず)まいが見事な日本家屋である。
「いってらっしゃい、お気をつけて」
古い靴箱が並ぶ趣深(おもむきぶか)い玄関で、私は二人の住人の出発を見送るところだ。シングルマザーでお団子頭がトレードマークの風花(ふうか)さんと、その娘の椿(つばき)ちゃん。椿ちゃんはあずみの最年少、ぴかぴかの小学二年生だ。
「いってきますのハイタッチ！」
「いってきますのハイタッチして、きなこちゃん！」
「椿もハイタッチして、きなこちゃん！」
二人といってらっしゃいのハイタッチを交わした。
「きなこ、ケガしないように気をつけてよね」
「はい、気をつけます、風花さん」
急いでいても私を気にかける風花さんの心遣いと、母娘のぎゅっとつながれた手の両方にほっこりする。
母娘を見送ってから、私は麦わら帽子を被って庭に回った。数日後にゴールデンウィークを控えた庭は、爽やかな陽気だ。
「今日はどうかな」
広い庭の端に作った家庭菜園の前にしゃがみ込む。植えた枝豆の種が発芽するのを



待っているのだ。初めて植えた枝豆の種は、発芽が一番の難所だという。
「まだか……」
毎日ハラハラしながら枝豆を見守っているのだが、今日も芽は出ていない。
「芽、出てこい」
埋まっている種に呼びかけていると、隣にとてとてと小さな茶トラ猫がやってきた。朝陽に透ける薄茶色の毛がふわふわだ。生後半年くらいの子猫にふっと笑いかける。
「おはよう、豆茶猫(まめちゃねこ)ちゃん。二見(ふたみ)くんと一緒じゃないんですか？」
豆茶猫ちゃんの喉に指を添わせると、ゴロゴロ言いながら、気持ちよさそうに目を細める。
この猫は二日前にここ「あずみの」にやってきた。
捨て猫を拾いがちな二見くんに拾われてきたのだ。彼は三ヶ月に一度くらいの頻度で捨て猫を持って帰ってくる。
まだ芽が出ない枝豆の横で豆茶猫ちゃんと戯(たわむ)れていると、縁側に二見くんが現れた。
「おはようございます、二見くん」
彼は長い髪で目元が隠れがちだ。そのため、一見、陰気な印象を受ける。だが、よく見ると彼の目や鼻はそれぞれ形が良い。さらに、すっきりした顎の線が綺麗なので、

全体として実は整った顔立ちをしている。隠れ気味なのがもったいない青年だ。
「きなこ、ごめん」
もともと猫背の二見くんの背中が、申し訳なさそうにさらに丸くなる。
「豆茶猫がいつの間にか部屋から逃げたみたいで」
「可愛いので大丈夫ですよ。ねー豆茶猫ちゃん」
「やー」
にゃーとも、にーとも取れない声で鳴く豆茶猫ちゃんを抱き上げて、縁側に立つ二見くんに渡す。
「ありがとう」
私より二つ年上の彼は二十七歳、職業は在宅プログラマーさんだ。一日のほとんどをシェアハウスあずみので過ごす私と彼は、よく顔を合わせる。
麦わら帽子を外しながら、私も彼と一緒に縁側から室内へ上がった。縁側に面する共用リビングは、二十五畳の広々とした和室だ。大きなダイニングテーブルと、やわらかい座り心地の紅色（べにいろ）ソファ。ソファの前には飴色（あめ）が輝く長机が置かれ、畳の香りがする落ち着いた雰囲気だ。
私はリビングの端、大きな壁付けキッチンで水を飲んだ。後ろから二見くんの声が



聞こえる。
「きなこの枝豆、芽が出た？」
「いえ、今日もまだでした」
肩を落としつつ振り返ると、二見くんのきゅっと上がった猫みたいな目尻が気まずそうに下がる。一緒に落ち込んでくれるのが、彼の素敵なところだ。豆茶猫ちゃんを腕に抱いたままの二見くんに問いかけた。
「豆茶猫ちゃんの引き取り手は見つかりそうですか」
「うん、もう見つかった。ゴールデンウィークに届けに行く予定」
「すぐに猫の引き取り手を見つけてくるの、すごいですね」
両手でぱちぱちと拍手すると、彼は「別にすごくないよ」と素気（そっけ）ない返事だ。
「でも……もう行っちゃうと思うと、寂しいですね」
豆茶猫ちゃんのくるんとつぶらな瞳を見つめて切なくなる。飼い主が見つかったということは、あずみのから去るということだ。
「あずみのでも、猫が飼えたらいいんですけどね」
「……僕も、そう思うけど」
「二見君」

二見くんが抱く豆茶猫ちゃんを撫でていると、渋い声が彼を呼ぶ。彼の後ろに背の高い男性が現れた。

「猫の滞在は一週間が限界ですからね」

「高瀬さん、おはようございます」

苦言を呈すスーツ姿の彼は、高瀬さん。足が長く、細身でスタイルがいい彼は立ち居振る舞いが優雅であり、顔の造りもスマートだ。彼は四十代半ばだが、歳を重ねてさらに魅力を増すような美麗中年である。

「おはようございます、きなこさん」

高瀬さんは胸ポケットからスマホを取り出して、私たちに向ける。

「ミクリさんは猫アレルギーなので。あずみので猫は飼えませんよ」

スマホの画面では、長い髪が美しい女性が微笑んでいる。スマホの中の彼女が声を出す。

「二見くんごめんね！　猫は好きだけど、私はアレルギーがあるの」

スマホの中でごめんねと両手を合わせる彼女は、ミクリさん。高瀬さんのＡＩ彼女だ。彼女はスマホの中の存在なので、アレルギーなんて関係ないと、私を含めた他の住人たちは抗議することもできる。けれど、二見くんも他の住人も、それは言わない。



高瀬さんがミクリさんを本気で愛していると、受け入れているからだ。

二見くんは背を丸めて息をつく。

「高瀬さんも、ミクリさんも。何回も言わなくてもわかってるよ……猫は一週間だけでしょ」

「わかっているのならいいのですが、先ほど、部屋から猫が逃げたという話が聞こえたので。私たちの部屋に来られては困ります」

「ごめん」

二見くんが頭を下げて謝ると、高瀬さんは気をつけてと念を押した。

二見くんは何度も猫を拾ってくるが、高瀬さんとの約束通り、一週間以内に猫はどこかへもらわれていく。彼がどうやって猫の飼い主を見つけているのかは不明だが、拾ってきた責任を彼は必ず果たす。だから、高瀬さんも猫を拾ってくるなと強くは言わない。

高瀬さんのＡＩ彼女と、二見くんの拾い猫。

あずみのではこんなふうに、不文律の譲り合いが大きく揉めることなく成立する。

私はそういうやんわりした空気が好きだ。

それに昨夜、二見くんがお風呂に入っている間に、私は見てしまったのだ。高瀬さ

んがリビングのソファで丸まる豆茶猫ちゃんに、「ふわふわの毛ですね」と話しかけているのを。

高瀬さん、本当は猫が好きなのだ。

でも彼女のミクリさんのために、あえて猫を追い出す。そういうところが、高瀬さんの見逃せないポイントだ。

私は高瀬さんが見せたスマホの画面の中にいる、ミクリさんに挨拶する。

「ミクリさん、おはようございます」

やや間があって、スマホから音声で返事がある。

「おはよう、今日は暑くなりそうだから、気をつけて過ごしてね！」

「はい、ありがとうございます」

彼女はお天気ニュースのお姉さんのように親しみやすい。

「では私たちも出勤しますので、失礼します」

高瀬さんは公務員で、役所の財務課というお堅い名前の部署で働いている。彼はルールにきっちりしているので、似合いの職場のように思う。

「いってらっしゃい、高瀬さん、ミクリさん」

高瀬さんは、オーダーメイドで注文したという、ミクリさんそっくりのぬいぐるみも持って出ていった。大きさは三十センチくらい。そのぬいぐるみの背中側には、スマホを入れるためのポケットがある。そこにスマホを入れておけば、まるでぬいぐるみのミクリさんが話しているような臨場感が出る。



職場にあのミクリさんぬいぐるみを連れていって、どう扱っているのだろうか。

もし、職場のデスクの上にスマホを収納したミクリさんぬいぐるみを置いて、「ミクリさん、この対処をどうしましょうか」「ミクリさん、今日のお昼は何がいいですか」なんて話しかけていたらどうしよう。

世の中がみんな、ミクリさんを高瀬さんの彼女としてきちんと扱うあずみのような場所ではないだろう。

高瀬さんが職場でどう過ごし、どう見られているのかは気になるところだ。

役所に出勤する二人を見送ってからリビングへ戻ると、二見くんは自分の部屋に戻っていた。

「お部屋に帰っちゃったんですね……」

もう少し豆茶猫ちゃんと遊びたい気持ちもあったが、まずやるべきことに取りかかる。

「今日は注射の日だから、忘れずにっと」

冷蔵庫からペン型の注射器を取り出した。ソファに移動して、太ももに自分で注射を行う。

「痛くありませんように」

祈りながら太ももに細い針をぶすりと刺すと、ちくりとしただけで痛みが過ぎ去った。痛いところにうっかり当たると泣くほど痛い。

「今日はアタリ、ラッキー」

私は定期的に自己注射が必要な体なのだ。初めの頃は泣きながらしていた注射だが、今ではさらっとこなせる。注射を片づけた私は、まぶしい光が照らす縁側を眺めてから決めた。

「今日は天気がいいから、廊下に掃除機をかけよっと」

共用リビングの奥、渡り廊下の先に各人の個室がある。歩くとやや軋む廊下に、古い掃除機をガーガーとかけながら進む。その先には、六畳の和室が四室と、一番奥に一部屋だけもう少し大きい風花さん母娘の部屋がある。私の個室は六畳だが、一人暮らしなら十分だ。畳も気に入っている。

私の部屋の前を過ぎたところで、思わず大きな声が出てしまった。

「あ！」



ちょうど二見くんの部屋の前で、ごりっと左足が何かを踏み、視界がひっくり返った。なすすべもなく、廊下にバタンと情けなく倒れ込む。バタバタと足音がして、二見くんの部屋の引き戸が勢いよく開く。

「何の音⁉」

廊下に転がる私を確認した二見くんが駆け寄る。

「きなこ、大丈夫？」

「あ、え、はい。でも何が起こったのか、ちょっとわからなくて」

のそのそと起き上がり、転んだ原因を探す。けれど、何を踏んだのかわからない。私の左側に膝をついた二見くんが、ぐいと小さな指人形を私の目の前に差し出した。

「椿のおもちゃを踏んだみたい。見えなかった？」

「見逃したようです」

二見くんがハァと深いため息を吐く。彼のため息には、やれやれと、もうどうしてこんなことにと、勘弁してよの三種類がある。

おそらくこれは、もうどうしてこんなことに、だろう。

「僕から廊下に物を置かないように注意しとくよ」

「いえいえ、私が不注意なだけですから」

彼がまた、ため息を吐く。

「……気をつけて。怪我とか見たくないから」

ため息は、やれやれ、という意味だと思う。

「気にかけてもらってありがとうございます。気をつけますね」

私が何事もなく立ち上がったのを確認してから、二見くんは部屋に戻っていった。

部屋の中から豆茶猫ちゃんの可愛らしい声がする。

私はよく転び、よくぶつかり、足には青あざが絶えない。

だから二見くんは、ぎゅっと眉間に皺を寄せ、何度でも、気をつけてと低い声で言う。でもその声もため息も、たびたび優しいのだ。

掃除を終えた私は、明日は膝に青あざができるなと感じながら、今度はキッチンへ向かった。シンクに置かれた朝ごはんの皿の片づけに取りかかる。

「今日はどんな豆料理にしようかな」

縁側から明るい陽が入る壁付けキッチンで朝の洗い物をしながら、今日の豆料理について思いを巡らせる。

私は現在、定職についていない。あえて肩書を持つならば、立派な無職。



近所のカフェで人手が足りないときに呼ばれたり、福さんからシェアハウスの掃除や片づけを任せられたりしている。だが、どれも些細なことで、お手伝い程度のものばかりだ。お皿についた泡を水で流しながら考える。

「えっとたしか、冷蔵庫に残っている豆は……」

豆田きなこの名の通り、私は大の豆好きである。

豆好きになったのは小学校三年生のときだと思う。

夏休みの自由研究で、「豆田」の苗字にちなんで、豆を題材にしようとおばあちゃんが言った。そのときに私は初めて、醤油、豆腐、味噌に餡子、そしてきなこまで。全部が豆であることを知ったのだ。

あんなに小さいのに多様に変身でき、おいしく、さらには良質なタンパク源であるとも知って感激した。

「豆ってすごい。きなこって、すごくいいあだ名だね、おばあちゃん」

「きなこ、そりゃあそうだよ。だって、このおばあちゃんが名付けたんだから！」

人生で一番の発見をした私は、おばあちゃんに大笑いされた。

たぶんそのとき、小さいのに、集まるとものすごいパワーを発揮する豆に魅了されたのだ。

それ以来、豆を好んで食べていたが、大人になり、しばらく豆好きであることも忘れていた。福さんに好きなもので心を満たせと言われてやっと、豆好きを再燃したところだ。

だから近頃は毎日、豆を愛でて暮らしている。庭に枝豆を植え、朝、昼、おやつ、夜と豆を食べることに精を出していた。

キッチンの片づけを終えて、冷蔵庫の中を確認する。豆乳、さらに納豆と目が合った。

「豆乳と納豆……これを混ぜたら、今度こそ何か革命が起きそうな予感が」

「やめときなよ、きなこ」

豆乳と納豆を手に冷蔵庫から顔を出すと、キッチンの換気扇の下に、老婦人が立っていた。そこが彼女の定位置だ。

「冴子さん、おはようございます。この組み合わせ、前はあんまりだったんですけど、今日こそいける気がしてるんです」

「その意気込みはどこから来るんだろうね。負け確って言葉を知ってるかい、きなこ？」

「知っては、いますが」

カッカッカと笑った冴子さんは七十八歳。

手入れのいい白髪が似合う彼女は、赤いリップの唇で電子煙草を愛用している。電



子煙草は紙煙草と違って歴史の浅い、新しい煙草だ。電子煙草を吸い続けた人間が晩年にどうなるかは未知で、まだ研究が進んでいないという。私ならそんな得体の知れないものには手を出さない。だが冴子さんは、わが身をもって電子煙草の影響を人体実験すると宣言しているほど、肝が据わっているのだ。

換気扇の下で電子煙草をぷかぷかさせた冴子さんは、今日も黒いワンピースが決まっている。

「豆乳と納豆の共演、今度こそ新しい扉が開くかもしれないじゃないですか」

「経験上、見えるものもあるけどねぇ」

キッチンに豆乳と納豆を並べて、首を傾げる。この二つ、そんなに望み薄な組み合わせだろうか。

「同じ大豆由来なので、あるときはダメでも、あるときなら何かが起きるはずです」

「可能性がゼロとは言わないけどねぇ」

私が豆の料理を作っていると、うっと顔を歪める人が続出する。

「チャレンジングな組み合わせが、豆料理の楽しいところなのですが」

「前に高瀬君が言っていた『食材で遊ぶのはどうかと思います』に同感なところはあるよ」

遊んでいると言われたらそうなのだが、これは創作料理という、いつか革命を起こす豆との戯れなのだ。豆田きなこの名に恥じぬよう、私は真摯に豆と向き合っている。

「まあ、若者のやることは見守るのが、老害の役目かねぇ」

幼い頃に感じた豆への可能性を、今も胸に宿しながら私は言った。

「おいしかったら、ご馳走しますね、冴子さん」

「期待してないよ」

冴子さんはけらけら笑いながら煙草を吸い終え、日課の散歩に出かけていった。彼女は夫の遺産を使いきったら潔く死ぬと豪語しており、散歩と酒とバスツアーに明け暮れている。

冴子さんを見送ってから、私はのんびりと調理を始めた。

悩んだ結果、本日のお昼ご飯は「豆乳納豆味噌汁」だ。

できあがったのは、白濁した汁。汁からは、ねっとりとした湯気が立ち上っている。豆乳の濃い豆の香りと、味噌の安定した香り、そして納豆の独特な香りがキッチンに漂う。なかなか独創的な香りだ。

お椀に味噌汁を注ぐと、一仕事終えたらしい二見くんが豆茶猫ちゃんとともにキッチンにやってきた。

「きなこ……今日は何を作ったの？」

「豆乳納豆味噌汁です。二見くんも食べますか？」

会心の出来だろうと二見くんに笑いかけると、彼の頬は引きつっていた。彼のなで肩にひっついていた豆茶猫ちゃんが、肩から飛び降りてソファへ逃げていく。猫にはちょっと刺激的な香りだったかもしれない。

「どうぞ」

「ど、どうも……」

二見くんに汁椀を手渡す。受け取った彼は引きつった顔のまま、ありがとうとぼそぼそ言った。

そこへ散歩から戻った冴子さんの軽快な声が響く。

「二見君くらいだよ、きなこの料理に付き合うのは！」

笑いながらキッチンを通り過ぎた冴子さんは、ソファで丸まる豆茶猫ちゃんの隣に座る。

「冴子さん、今から食べるので見ていてくださいね」

「いただきます、きなこ」

「はいどうぞ、二見くん」
二見くんと一緒に食べた豆乳納豆味噌汁の出来は、まあ、言うなればまあまあだった。食べられないことはない。二見くんも私も一杯は食べた。二杯目はギブアップだ。やはり納豆の強い意志に勝てない感じがあった。
「二人ともよくやるよ！」
冴子さんがカッカッカと笑っていた。

日が暮れる頃、華やかなパワーあふれる母娘があずみのに帰宅した。
「ただいま！　椿が帰ったよ！」
「風花も帰りました～」
「おかえりなさい、二人とも」
玄関に顔を出して二人を出迎える。
「あのね、きなこちゃん、ママってばメイク崩れまくりで泣けてくるんだって！」
「言わなくていいこと報告しないでよ、椿～余計疲れる～」
一日の疲れを象徴するように、トレードマークの団子頭がやや崩れた風花さんが椿ちゃんにしなだれかかる。三十代半ばにもなると、メイクは直しても直しても崩れるとは風花さんから何度も聞いた話だ。
「もう、ママったらしっかりして！　椿が運んであげる」
「ありがとう、椿～」
椿ちゃんが風花さんを背負う真似をして、廊下を歩き始める。二人が戯れる後ろを、私もゆっくりと歩いていく。
私は祖母と二人で暮らしてきて、母親を知らない。だから、こういう仲良し母娘っぽい場面に居合わせると、お腹の中がほくほくする。
荷物を置いて着替えた風花さんが、慌しく晩ご飯の準備をし始めた。忙しない風花さんとは対照的に、時間の流れなどどこ吹く風な椿ちゃんが私のそばに寄ってくる。
「きなこちゃん、今日はなんの豆料理を作ったの？」
彼女はきらきらした好奇心の瞳で、私に毎日この質問をする。
「豆乳納豆味噌汁ですよ。まだ残っているので、食べたかったら言ってくださいね」
ゲッと口を歪めた椿ちゃんは、ポニーテールを揺らしてさらりと去っていく。椿ちゃんの軽やかに揺れる髪が元気で好きだ。メニューを聞きたがるのに、食べたいとは言ってくれないところがミソである。
「遠慮しなくていいんですよ、椿ちゃん」

「いらなーい！」

ソファに飛び乗った椿ちゃんがさっぱり答えるので、笑ってしまった。

不評だが、それでもいいのだ。私は毎日、豆と戯れる。今はそうやって、福さんからもらった宿題通り、好きなもので心をいっぱいにするために暮らしている。

そうしていつか、心が満ちるときが来たらやっと、「これからどうやって生きていくか」を考えようと思っている。

「きなこさん、今日は何を作ったのですか」

夕食後にリビングのテーブルでコーヒーを飲んでいたら、帰宅した高瀬さんにも尋ねられた。答えると、向かい側に座る高瀬さんは買ってきた弁当を食べながら言った。

「きなこさんの豆料理の勝率は、一割ですよ」

「え、そこまで低いですか？」

なかなか辛辣（しんらつ）。テーブルの上でスマホスタンドに立てかけられたミクリさんが「がんばれ！」と言ってうふふと笑うので、私もうふふと笑い返す。高瀬さんは正直にものを言うのに、強くやめろと言わない。そういうところがこそばゆい。

広い畳の共用リビング、豆と戯れる豊かな時間に、住人たちのまなざしの温度。



そしてなんと言っても、彼ら一人ひとりが持つ、ささやかな思いやりとお人柄。

あずみのには、私の「好き」がまだまだ数えきれないほどあるはずだ。

私はそんな豆粒みたいな小さな「好き」を、たくさん集めたい。だから私は毎日、今日見つけた小さな「好き」を枝豆色の秘密ノートに書き込んで、眺めて、にやりと笑う。宿題のために始めた習慣だが、今では寝る前のお楽しみタイムである。

これからあずみので、私はどんな豆に出会うだろうか。

住人たちの、どんな好きなところを見つけることができるだろうか。

そう考えるとまた、豆みたいに小さなあったかさが、私の心にぽっと灯る。

つまり、私の宿題は現在とても順調である。

# 第一章　高瀬さんの好きなところ

晴天のゴールデンウィークが始まり、初夏を思わせる朝の風が縁側から吹く。がらんとしたリビングを透明な風がくるくる回っていた。

あずみの玄関で、私は豆茶猫ちゃんを入れたキャリーケースを抱えた二見くんを見送っていた。豆茶猫ちゃんと最後のお別れをする。

「豆茶猫ちゃん、元気でいてくださいね。二見くんの紹介だから、飼い主はきっと素敵な人ですから、安心してください」

キャリーケースの中の子猫に語りかけると、にーと高い声が返ってきた。別れは惜しいが、私は一歩下がる。早く離れないと二見くんが行きづらくて迷惑をかけてしまう。前の拾い猫ちゃんとも別れが辛くて、気がつけば玄関で二十分も「またね」と言い続けていた。二見くんはいつまでも待ってくれるところがあるので、私が気をつけないといけない。

「今日はもうお別れいいの？」

彼が首を傾げる。

「はい、あまり長く引き留めると辛くなります。それに、二見くんにご迷惑ですから」

「……たしかに、前のはちょっと長かったけど」

「すみません……」

やっぱりそう思っていたかと情けなくなり肩をすくめる。

「別に、僕はいいよ」

彼が端的にそう言ったとき、玄関の引き戸を開けて蒼い作務衣を着た福さんが入ってきた。私はすぐに挨拶する。

「福さん、おはようございます」

「おはよう。お、出かけるところかい？」

白いビニール袋を手に提げた福さんが二見くんを見て問いかける。二見くんが静かに頷く。

「そうか、気をつけて行っておいで」

「うん、福さんは何か用事？」

「ああ、枇杷をもらったからお裾分けにね」

福さんはずっしりしたビニール袋を私に手渡す。中を覗くと薄橙色の枇杷がたくさん入っていた。

「わあ、ありがとうございます。枇杷、好きです」
「良かった。みんな、ゴールデンウィークはどうしているんだい？」
「立ち話もなんですから、福さん、上がっていきますよね？」
私がスリッパを出そうとすると、福さんは手を横に振った。
「いや、すぐ帰るよ。もうすぐ孫と出かける予定があるんだ。でも、その前にあずみののみんながどうしているのか、聞きたかったんだよ」
「僕は今から猫を届けに行くんだけど」
二見くんは自分の予定を伝え、私は他の人の予定と、私と高瀬さんだけがあずみのに残る旨を伝えた。すると福さんは朗らかな笑みで頷いた。
「きなこと高瀬君が残るんだね。もし、高瀬君の予定が変わって、きなこが一人になったり、寂しくなったりすることがあったら、うちにおいで。わたしは夜には家にいるからね」
「ありがとうございます、福さん。でも私、子どもではないので一人で平気ですよ」
「まあまあ、きなこ。人はふっと夜に惑わされて、寂しくなることもあるんだよ。避難場所が増えて悪いことはない。高瀬君にも、同じように言っておいておくれ」
穏やかにそう言った福さんは、私と二見くんの肩を順番にぽんぽんと叩いて帰っていった。



福さんが帰った後の玄関で、二見くんと視線が合う。
「福さん、お節介だよね」
「ふふっ、そうですね。嬉しい限りです」
「さすがに高瀬さんは福さんちには行かないよ」
「私もそう思いますが、一応お伝えしておきます」
近所に住む福さんはもらい物が多いからと言って、たびたび、ああやってあずみのにやってきてはお裾分けをしてくれる。常にあずみのの住人を気にかけてくれているのだ。
「でも、僕も安心した」
「何がですか？」
「僕はゴールデンウィークが終わるまで帰らないけど、福さんがいるなら安心だよ」
それは私の安心なのに、二見くんの安心になるのが彼の優しいところだ。
「あとは……怪我しないように気をつけて」
「風花さんにも冴子さんにも重々言われていますので、気をつけます」
「みんな言うことは一緒だね。じゃあ、いってきます」

二見くんはくすりと笑ってから出かけていった。在宅ワーカーである彼の食事は基本的にカップラーメンで、買い物にもたまにしか行かない。明らかに出不精だ。

けれど、豆茶猫ちゃんを新しい飼い主のもとへ届けるためなら、ゴールデンウィークの混雑の中でも颯爽と出ていく。そういうフットワークの軽さとのギャップに、猫への愛着と、彼の愛情深さが同時に見える。

見送りを終えた私は、枇杷を冷蔵庫に収納した。枇杷は長持ちするので、ゴールデンウィークが終わってみんなが帰ってきてから一緒に食べよう。

朝のキッチンを片づけてから、麦わら帽子を被って庭へ回った。新緑がまぶしい庭の家庭菜園の前に屈む。

「もうダメなのかな……」

ふっくらした土に植えた枝豆の種から発芽はない。もうそろそろ芽を出してくれてもいい時期なのに、なんの動きもない。しゃがみ込んで膝を抱えて項垂れていると、縁側から声がかかった。

「きなこさん」

同時に、コーヒーのアロマが香る。



立ち上がって右回りに振り返ると、縁側には長い足をすらりと垂らした高瀬さんが座っていた。コーヒーカップを縁側に置いた高瀬さんの横には、スマホスタンドに立てかけられたスマホ。その中にミクリさんがいる。二人で縁側の日向ぼっこコーヒータイムか。

「枝豆の芽は出ましたか？」

私は首を横に振った。

「いえ、まだ……」

「そうですか。ミクリさん、枝豆の発芽までの平均期間はどれくらいですか？」

「五日から十日だよ！」

ミクリさんの明るい声に現実を突きつけられる。

「もう一週間経ちました。希望は薄いかもしれません」

私が弱音を吐くと、高瀬さんが正確に言い直す。

「まだ三日もありますよ」

「……そうですよね、もう少し見守ります」

励ましてくれたと受け取った私は、麦わら帽子を被ったまま高瀬さんとミクリさんの隣に腰かける。

「高瀬さん、さっき福さんが枇杷を持ってきてくれて」
福さんからの伝言を届けると、高瀬さんは軽く息をついた。
「家に来ていいって、子どもではないのですが」
「私もそう言いました。でも気にかけてもらうのって、くすぐったくて、嬉しいですよね」
福さんを想うと口元が綻ぶ。高瀬さんの口元も私と同じように緩んだ気がした。
「……そのくすぐったさは、わかります」
静かに風が吹き抜けた後、高瀬さんが口を開く。
「きなこさん、もう少ししたら、私もミクリさんと出かけます」
「デートですね。楽しんできてください」
「ありがとうございます。けれど、夜には帰りますので」
普段の高瀬さんは、私に予定を告げたりせず、自由に自分のスケジュールで活動している。それなのに、今日の彼は私に予定を告げた。あずみので一人きりになる私を案じてくれているからだ。
冴子さんは息子さんが住む東京へ向かい、風花さんと椿ちゃんは実家に帰省、二見くんも豆茶猫ちゃんを届けた後は帰省するそうだ。福さんにも伝えたように、今夜あ



ずみのに残るのは、私と高瀬さんだけだ。ミクリさんもいるけれど、人間で、という意味で。
「夜にシェアハウスに女性一人、ということにはしませんから。安心してください」
「福さんに続いて、高瀬さんにも気を遣ってもらって恐縮です」
「こういうときのための共同生活なので、当たり前のことですよ」
眉と眉の間に縦皺を入れた彼はふいと顔を逸らす。つんとした態度でも、彼が思慮深く、情に厚い人だということが、じわじわと伝わってしまうものだ。
「今までも長期休みの時期に、私と高瀬さんがあずみのに残ることが何度かありましたよね」
「それがどうかしましたか」
それは、私と高瀬さんだけが、長い休みに顔を見せに行くような相手がいない、という証明でもある。
「他にどこにも行くところがない仲間だなと思っていて」
「私にはミクリさんがいますが、ここ以外に居場所がないという話なら間違いではないですね」
彼の冷静な同調に慰められる。

「勝手ながら親近感を持っているので、これを機に親睦を深めるのはどうでしょうか」
「親睦というと？」
「良かったら今夜、夕食をご一緒しませんか？」
彼の目が大きく見開かれる。驚かせてしまったようなので弁明する。
「あ、ミクリさんがいるのに、下心があるような誘いはしません。そんなしっとりした感情は一切ありません」
「私はあなたより十五歳も年上ですよ？　そんなことはわざわざ言わなくてもわかっています。私が聞きたいのは別のことです」
私の過分な説明を、高瀬さんはすぐ理解してくれる。彼はますます眉間の皺を深くした。
「もしかして夕食のお誘いは、きなこさんが私に豆料理を振る舞うのはどうか、ということですか？」
彼の整った顔が歪む。半分以上、顔で返事をしているので、私は笑ってしまう。
「そうです。今日は勝率一割のほうのおいしい豆料理を叩き出してみせます」
気合いを入れてぐっと握った拳を見せると、高瀬さんが咳払いする。そして、まるでクレーマーに対応するかのように毅然と言った。



「せっかくのお誘いですが、胃が大事なので遠慮します」
「さすがに私でも傷つきますよ？　食べられるものを出しますから」
「私は二見君のように物好きではないので。では失礼します」
高瀬さんが立ち上がり、コーヒーカップを片づけてから、さっとミクリさんを抱き上げる。
私の豆料理の勝率の低さのせいで断られるなんて不甲斐ない。しかし、料理が問題ならば、条件を変えたらいいのかもしれない。
高瀬さんは廊下の奥に向かって進んでいく。私は彼の背を追いかけながら問いかける。ワンチャンスを狙って、もう一度チャレンジだ。
「では、夜にお茶だけでもしませんか。ミクリさんをお部屋に置いてくる時間だけでも！」
彼の足が止まり振り返る。私も足を止めて廊下で向かい合った。
「どうして、食後にミクリさんを部屋に置いてくることを知っているんですか？」
「どうしてと言われても」
私は首を傾げる。どうしてわからないと思うのだろうか。そちらのほうが不思議だった。

「気づいているのは、きなこさんくらいだと思います」
「そうでしょうか。わかりやすいと思うのですが……」
あんなに大事なミクリさんを、彼は夕食後に自室に置いてから、わざわざリビングに戻ってくる。
「高瀬さんは食後にだけ、ミクリさんと離れてリビングでコーヒーを飲みますよね。高瀬さんの暮らしの中で、飛び抜けて異質な時間に見えますから」
これが目に留まらないわけがない。あずみの住人には福さんから、それぞれの「宿題」が授けられている。住人の中でも、高瀬さんの宿題は特にわかりやすかった。
「きなこさんは人をよく見ていますからね」
彼が言うように、私は好きなこと集めの一環で、みんなをよく見ているかもしれない。その延長で、私はみんなが福さんにもらった「宿題」が何なのかを予想している。
おそらく福さんが高瀬さんに出した宿題は、『食後の一時間、ミクリさんを部屋に置いてリビングで過ごすこと』だ。
彼は自室の前へ向かい、引き戸をさっと開ける。その背中を見つめ、お茶も無理かと諦めかけたとき、彼が振り返った。
「どうしてそんなに私と過ごしたいのですか」



格好悪くて言いづらいのだが、私は彼の問いにゆっくりと答える。
「椿ちゃんが大はしゃぎして皆さんがいる食卓に慣れてしまったのか……人気（ひとけ）のない静かなリビングは居心地が悪くて」
私はリビングのほうへ視線を向ける。
「あの騒がしさがどれほど……私をほっとさせていたのかを思い知ります」
それが福さんの言う「夜に惑わされる」という状態なのかもしれない。
「でも、福さんの言葉に甘えて家に押しかけるほど、迷惑はかけられません」
私の真意を測るように、こちらをまっすぐ見つめる高瀬さんを見つめ返す。
「今夜は少し寂しくなってしまうだろうと予想できるので、高瀬さんと声をかけ合いたかったんです。けれどやはり、これは私のただのわがままですね」
我慢しようと覚悟して微（かす）かに笑うと、高瀬さんが真面目な顔で言う。
「……仕方ないですね。お茶だけですよ。デート先でコーヒー豆をお土産（みやげ）に買って帰ります。帰ったら、一緒に飲みましょう」
「いいんですか⁉」
「できない約束はしません」
目の前がぱっと明るくなった。彼は渋い声で付け加える。

「コーヒーに添えるお菓子は、きなこさんが用意してください」
「はい！」
「けれど、条件があります」
高瀬さんの表情は、夜のお茶会の相談をしているとは思えない険しさだ。
「な、何でしょう？」
「市販のお菓子にしてください。きなこさんの手作りは遠慮させてもらいます」
「いや、手作りの豆菓子って世の中にいっぱいあってですね。がんばりたい気持ちがたくさんあるというか」
「いいですね？」
念を押されて私は観念する。
「……はい」
肩をすくめて返事をすると、高瀬さんは無言で引き戸を閉めた。閉まった戸の前で、顔がにやける。私みたいな構ってほしがりな人を見捨てられないところが、高瀬さんのチャームポイントだ。軽やかに廊下を引き返して、共用の洗面台へ向かう。
「買い物に行かなくては」
私が豆菓子を買いに行く店は決まっているのだ。



まずは身支度に取りかかった。
洗面台へ向かい、鏡の中の垂れ目の自分を見つめる。美人ではないが、特別に不細工でもない、平凡な丸顔だと思っている。丸い輪郭に添う癖のない素直な短い髪をブラシで梳かしながら考える。
高瀬さんはコーヒーにこだわりがあるから、きっと質も品も良いものを買ってくるだろう。それに何と言ってもコーヒーは、豆だ。
「コーヒーと豆菓子のお茶会ならもう、それは豆パーティーだよね」
どこにも帰るところのない私と高瀬さんの、豆パーティーの夜。
ゴールデンウィークに予定が何もなかったので、浮かれてしまう。

○●○

高瀬さんたちがデートに出かけるのを見送り、私はあずみのにタクシーを呼んだ。
私は車の運転どころか、危険なので自転車にも乗れない。広大な安曇野での移動手段は、タクシーが基本だ。玄関前の木陰に置いた折り畳み椅子に座って、のんびり迎えを待つ。

「なかなか来ないからね」

普段でもタクシーが来るには時間がかかる。ゴールデンウィークなので、今日は特にだろう。山の稜線を見ながらぼんやり考える。

以前、こんなことがあった。

あるとき私は、あずみのの住人たちに出かけると宣言して家を出発。だがいつまで経ってもタクシーが来なかった。だいぶ前に出ていった私が、玄関前で突っ立って待ち続けているのを見つけた風花さんは驚いて言った。

「きなこ、まだ待ってたの？　家の中で待ってたらいいのに」

彼女のお団子頭が困惑したように揺れる。

「家の中まで呼びに来させるのは、タクシーの運転手さんに迷惑かと思いまして」

「運転手さんはそんなの慣れてるだろうからいいのに……でも、きなこは気になるんだよね」

少し考えた風花さんが、折り畳み椅子を玄関前に置いてくれた。

「この椅子、前からあるけど誰も使ってないみたいだから、ここに置くね。きなこのタクシー待ち用！」

満足げに笑った風花さんのおかげで、私のタクシー待ち時間は楽になった。いつの



間にか、椿ちゃんが紙に「きなこちゃんがタクシーまつイス」と書いて、背もたれのところに貼ってくれていた。

そんな二人が用意してくれた私の居場所に座って、青い山々を眺めているとタクシーがやってきた。時計を確認すると、しっかり時間は経っている。だが、割と早かった、という気持ちだ。

「この折り畳み椅子には、待ち時間を退屈させない効果があるのかも」

そんなことをつぶやきながら、私はタクシーに乗り込んだ。安曇野で暮らし始めてから、土地の時間自体がおっとり流れているのを感じている。雄大な北アルプス連山が一望できる安曇野で息をすれば、人ものんびり暮らすのが自然になるのかもしれない。

土地のリズムに沿って急がず、法定速度で走るタクシーで穂高駅に向かった。安曇野で一番大きな駅である穂高駅は、社殿造りで貫録がある。立派な造りで観光客を迎える気が満々であるが、電車は一時間に二本しか来ないという静けさだ。穂高駅を横目に通り過ぎながら、くすりと笑う。

「張りきっているのに騒がしくない。この差が愛らしい駅だよね」

電車を使うことはほぼないが、やる気が満ちているこの駅を眺めるのは好きだ。ま

た機会があれば、利用したいと思っている。
　駅からまっすぐ徒歩三分で、安曇野の観光名所である穂高神社にたどり着く。せっかくなので、一応お参りしておいた。
　けれど、私のお目当ては神社の手前に五軒ほど並んだ商店の一角。安曇野で見つけた地元密着の名店、豆菓子専門店「豆歩（まめほ）」だ。木造長屋の角店舗の、重い硝子戸（がらす）を引いて足を踏み入れる。
「こんにちはー」
　店には餡子の甘い香りが満ちていて、ほっと息をつく。昔ながらの雰囲気がある店内には、豆菓子がずらりと並んでいる。豆が主役の空間に、私の目も鼻も大喜びだ。お気に入り店、最上位で間違いない。
「今日はどれにしよう……！」
　入店してさっそく、豊かな豆菓子たちに目移りする。すると、奥から和服を着こんだ女将さんがやってきた。女将さんは深い皺を刻んだ優しい目尻で微笑む。
「いらっしゃい、きなこちゃん」
「女将さん、お邪魔します。ゴールデンウィークなのにお休みじゃなくて助かってしまいました」



「この時期は穂高神社さんに観光客が増えるから、お休みなんてしていられないのよ。でも、最近膝が痛くてね」
　着物の上から膝のあたりを擦る女将さんの表情が曇る。女将さんはもう六十代後半くらいだろうか。膝が痛むこともあるだろう。
「ご無理しないようにしてくださいね。豆歩さんが長期休業になったりしたら、私が困ります」
「ありがとう、きなこちゃん。でも明日には息子が顔を出すって言っているの。店番を代わってもらえるわ」
「それは助かりますね。息子さんにはぜひ帰ってきてもらわないと」
　いつ来店しても、女将さんはゆるりと話しかけてくれる。豆菓子が魅力的なのはもちろんだが、品の良い女将さんの温厚な対応が恋しくて、豆歩さんに来ている節がある。
「ほら、きなこちゃん、豆大福。食べていって」
　世間話をしているうちに、女将さんがお盆に載せた豆大福とほうじ茶を持ってきてくれた。店の端にある長椅子に並んで座って、さらに長話をするのもお決まりの流れだ。
「後で豆大福のお金払いますね」
「そんなのいいのよ。年寄りの話をこんなに気持ちよく聞いてくれる子なんて、他に

いないんだから。もうきなこちゃんに息子の嫁になってほしいくらい」

女将さんは私を嫁に、と何度も言ってくれる。

「そんなことを何度も言ってくれるのは女将さんくらいで……もったいないお言葉です。今はまだ誰かのお嫁さんだなんて想像がつかないのですが」

「きなこちゃんは今までお仕事が忙しかったって言っていたものね。機会がなかっただけだと思うわ」

「そうだったら、嬉しいなあと思います」

安曇野に来るまでの私は、高齢者介護施設で働いていた。仕事がというよりも、仕事とプライベートの両立が過酷で忙殺され、いつの間にか友だちとの繋がりすらなくなった。そんな状態なので、恋をする余裕など全くなかったのだ。だから、くすぐったいが「嫁に」と言われて悪い気はしない。

女将さんは話題が豊富だが、最終的には息子さんの話に行きつく。

「それにしても、息子ったら相変わらずなのよ」

女将さんは自身と夫が亡くなった後、息子さんが一人きりになるのではと前から案じている。だから、結婚して安心させてほしいと願っているのだ。

「どこに住んでいるのかも教えてくれないのよ。住所くらい教えるものでしょ？　米や豆くらい送ってやりたいのに」

「息子さんにもお考えがあるとは思いますが、代わりに私が送ってもらいたいくらいです」

「それはいい考えね。きなこちゃんに送るわ！」

「女将さん、冗談ですよ！」

私の冗談に明るく返す彼女と一緒にお茶を飲む。

「引きこもって心配かけたこともあるくせに、実家から出て行ったと思ったら住所を内緒にするなんて。やることが極端なのよね」

おそらく息子さんは自立心で、心配性の母親から距離を置きたいのだろうと推測している。でも休みには帰ってきて店番をしてくれるくらいだから、親子関係は良好なのだろう。

「豆大福いただきます」

「どうぞどうぞ」

私は豆大福にかぶりついた。もちっとした求肥（ぎゅうひ）の中に詰まった餡子はあっさり甘くて、大きめの豆がごりっとして噛み応えがある。かつて私が、どうしようもなく未来に怯（おび）えていた夜、豆歩の豆大福を食べたことはきっといつまでも忘れない。



立ち読みサンプル
はここまで